

## Interview mit TN26 (11.07.2017)

Q : \*\*さんのドイツ語の教職歴について最初、まあアンケートにも書いていただいたかもしれないけれども、改めてお願いできますか？

A : えーとですね、だいたい 2009 年の初めぐらいから、\*\*という、大学ではなくてほんとに民間の語学学校で教えているということで、基本的には少人数もしくはプライベート、ですから一対一という形で教えてますね。それをまあ週に 3 回とか 4 回とかいうときもあったのですが、まあ、そんなにもすごくインテンシブというわけではなくて、えーとまあ並行してと言いますか、わたしはドイツとオランダでデザインを学んでデザイン業もやっていますので、で言葉も好きだからということで、そういうドイツ語を教えるということにも従事してまして、それがですから 2009 年ぐらいからだから、まあ 7 年、8 年とかそれぐらいですね。

Q : ああ、そうなんですね。それで、ドイツ語を教えようって思うようになった最初のきっかけってというのはなんですか？

A : きっかけってというのは、まあ、なんでしょうね、もともと大学時代に英語を教えるとか、まあ塾とか家庭教師とかってことはあったんですけど、なのでまあ、語学が好きで語学を教えるってことはわりと身近でして、それで 2008 年末ぐらいまで、まあ 5、6 年間ぐらいヨーロッパにいたんですけど。で、最後いたのイタリアなんですけれど、イタリアからまあ東京帰ってきたときに全然わたし自身は東京にそれまで住んだことがなかったので、えーとまあ、デザインの仕事も始めるんですけど、ちょっともうちょっとこう、社会に入っていくときになにかこう、まあバイトとかパートとか、そんながつり入るっていうよりももうちょっと始められないかなと思ったときに、まあドイツ語教えるっていう手段はあるのかなと思って、検索してみたらそういう募集があったのでという感じですね。

Q : ああ何かに応募したっていう。

A : 応募して、という感じです。

Q : そうだったんですね。で、教え始めて最初の頃の経験はどうでしたか？例えばこう、教えることに向いている部分とか、あるいは難しかった部分とかっていうのは、なにかありますか？

A : そうですね、まあ、やっぱりいろんな方がいらっしゃるんで、それまで英語教えるってなると、まあ英語っていうのはそもそも中学高校とみんなが学校で習う教科なので、こう、なんていうのかな、中学生に教えるとか高校生に教えるとかっていうのが多かったんですけど、ドイツ語の場合ですとやっぱり年齢層も様々で、高校から学校でやっているからっていう子もいれば、高校から自発的に始める子もいれば、60代で始めるっていう方もいて、そういう、なんていうんでしょうね、今まで英語で教えるっていう、単純に教科として教えるっていうとか、学校のテストでいい点とるとかって

いう目的だけではなくて、えーとまあ趣味でやりたいとか、楽しみだからやりたいとか、あとは仕事で、必要ではないんだけどドイツ系企業だからやっておきたいとか、まあ本当に人が語学を学ぶ動機とか、そういったものは様々で、今までは学校の点数挙げるとか、例えば英検に合格する、TOEICに合格、いい点とりたいたとか、そういうのぐらいしか自分も知らなかったの、ほんとにいろんな動機があるんだなと思って、そういういろんな動機を持った人に教えるっていうのは、やっぱりちょっと新鮮といたしますか、また難しさもあったり…うん。

Q：どんなところが難しかったですか？

A：そうですね、その、ものすごく真剣に勉強するわけではないけれども、ある程度のお金を払ってやるっていうその動機がなかなか理解できなかったというか、そのわたしからしてみれば、あの、うちのその語学学校だと、週1回のレギュラーでも年40回で25万、20万から25万とか、あとプライベートでしたらほんとに40回で50万とか、かなりの大金がかかるわけなんですね。で、わたし自身そんなに大金をかけて勉強したことがないもので、それだけかけるんだったらかなり真剣にやりたいのかなと思いきや、そうでもなかったりとか、働いている方だったら、仕事は自分の思ってる100パーセント、イメージ通りのものではないんだけど、だからこそ、週に1回は自分の好きものにお金と時間を使いたいっていうことで習っているっていう方もいらっしやあって、そういうニーズがあるっていうのを理解するのが最初は難しかったっていうのはありますね。

Q：なるほど。教え方とかは…

A：教え方は、教え方というか、そういう人がそういう人なりにうまくなりたいという時には、じゃあどういふことを大事にしてあげたらいいのか、例えばこうやったら伸びるよとか、ものすごく伸びたい気持ちはもちろんあるんですけど、こう、なんていうんだろな、その時間を楽しく過ごしたいとか、ドイツってこうなんだよとか、ドイツ語圏こんな文化があって、考え方があって面白いよねっていう、そういう知ることが喜びであったりだとか、必ずしもドイツ語力がきちっと伸びていくことが目的ではない人たち、そういう人たちに教えるっていうのは、教え方の問題というよりも、そういう価値観に触れて、じゃあそういう人たちに向けて、ある程度の授業をするっていうのが難しいっていうか。

Q：あなるほど。で、デザインの仕事の方が本業でしたか？

A：まあ、そうですね。そっちの方が本業の面がありましたね。従事してる時間が長いという意味ではそうですね。

Q：その、ドイツ語教師としての仕事と、デザインのこととの関係っていうのは、自分の中ではどういふふうでしたか？

A：そうですね。もともとちっちゃい頃から絵を描くのど語学とどちらとも好きで、自分の中ではその二つをやることはすごく自然な感じでした。で、なんていうんでしょう

ね、それでまあ、ドイツでデザインを学んだので、ドイツ語もやらなきゃいけないかつたし、デザインも学んで、まあ一石二鳥といいますか、わたしにとっては理想的な組み合わせで。で、今も、そうですね、それがすごく、その二つがすごく全く違う分野で乖離しているっていう感覚はあまりなくて、もともと自分の好きなことを好きなものなりにやっているという感じが近いかなとは思いますが。

Q：なんか、二つの似ているところっていうのはあるんですか？

A：似てるところ。そうですね…なにかやっぱりこう、対象者がいて、まあドイツ語を教えることだったら学習者であったりとか、デザインだったらクライアント、もしくはターゲットで、そのターゲットに向けてなにを一番伝えたいかっていうことを、えーと、まあ浮き彫りにして、それを一番伝えやすいやり方で表現するっていう点は似ているかなとは思いますが。

Q：ああ、なるほど。それで、日本独文学会の教員養成・研修講座に参加され始めたのは何年からでしたっけ？

A：2011年ですね。2011年から2013年までです。

Q：それは、参加しようと思われたきっかけはなんですか？

A：その時は、教えて、その時で丸2年とか経っていて、最初はほんとに新しいことばかりだったんですけども、まあちょっと慣れ始めてきて、で、こういうふうにならなくて教えて、その場その場の授業ではそれなりにうまく教えられるかなっていう手ごたえはあったんですけども、こう授業とかこういう教えることっていうのを続けていって、その先にはなにがあるのかなとか、なんかこう、そもそもドイツ語を教えることとか学ぶことってどういう意味があるのかなとか、なんかこう根本的なことを考えたくなった、というのがあって。で、そういえばそもそも自分はドイツ語をきちっと体系的に教科として教えるっていうことを学んできたわけではなかったんで、ちょっとそういうのが、あの学べるところはないかなっていろいろネットで調べてまして、その時にたまたま見つけたという感じだったんです。

Q：そうなんですね。で、期待されて、どんなことを期待されてましたか？参加するにあたって。

A：小手先の、こうやったらわかりやすいとか、こういう練習が有効だということではなくて、もう少しなんていうんですかね、なんか理念とか、そういう教育、そういうことをなんで今やらなきゃいけないとか、そういうことを通じて結局どういう、どういう人、人のどういう部分を伸ばしていくのかとか、もうちょっとそういう大きな計画みたいのにアプローチできるのかなと思ったので。で、たしかそちらでなにかそういうモジュールかなにか、公開されていたかなにかで、それで拝見して、これは面白そうだとすることで応募したという感じですね。

Q：で、そのときの期待はどの程度満たされたかとか、具体例があればなにかお聞かせいただけますか？

A : そうですね。やっぱり言語政策の部分であったり複言語であったり、そういうのが非常に新しい概念だったので、ああなるほどそういうことが現場では考えられているんだという形で、非常にまあ刺激になりましたし、一つの指針と言いますか、単純に英語がしゃべれたらとか、ほかに言語ができれば経済的な利益が受けられるよとかそういうことだけではなくて、もうちょっとこう、人間的成長とか、社会とか国同士とか、文化のこととか、そういう視野が広い、視野を大きくした面での到達点みたいなのがいくつか示されたきがするので、それは非常に良かったと思います。

Q : 逆にになにか、物足りなかったこととか、期待にそわなかったとか、そういうのがあればなんでもご自由に。

A : そうですね、やっぱり大学で教えてらっしゃる先生がメインターゲットだったと思うんですけど、そうなりとやっぱり、ドイツ語力を伸ばすとか、広い意味でのドイツ語力を伸ばすということに力点がおかれていて、でもさきほどちょっと申し上げたんですけど、わたしの場合だとほんとに様々な目的でドイツ語を学ぶというか、触れるというか、そういうニーズがあるってということがわたしのまわりではそれが普通だったので、そういう様々なニーズ、様々な学びのニーズであるとか、あのやっぱり先生方はどうしてもこうやったら伸びるとか、こうやったらドイツ語力が伸びるからああでこうでという話になりがちなんですけど、生徒さんにとって、生徒さん側を見ると、必ずしも伸びることだけが目的ではないというか。なんかその差を感じるがあったので。先生は一所懸命伸ばそう伸ばそうとするんですけど、もうちょっと全体的な経験としてのドイツ語っていいですか、そういうものが求められているっていうのが、感じがしたので、そういうドイツ語体験みたいな感じですかね。そういうものとか、あとはそうですね、もうちょっと人によった？人の側に立ったっていうか、学びとしてのドイツ語だけではない、なにかそういう、例えば外国への憧れであったりとか、なにか新しいものを知る喜びであったりとか、そういう入口としてのドイツ語というか。なんかそういう側面も取り上げて頂きたかったかなというふうな感じはあります。

Q : ああなるほど。確かにね、大学高校ばかりですものね。他の参加者とは。で、教え始めた頃と、養成講座終わって、今、今も教えてらっしゃる、教え始めた最初の頃と比べて、教師としての今の自分をどのように評価されますか？

A : なかなか難しいですね。わたしも、自己像とかってメールで頂いて、どうなんだろうなってちょっと考えてたんですけど。うーん、なかなか…。ちょっと、結構余裕が出てきた分、自分がこれだけ用意してきたからこれは全部やらなきゃとか、そういうのがなくなったのはいい面である一方、なんかちょっと惰性みたいのも出てきて、まあこれはこれぐらいでいいだろうっていうような、流すような部分もあったりして、なかなかそのバランスが難しいといえますか、楽しく、その時間を楽しく過ごすというか、やっぱりみなさん仕事されてる方が多いので、わざわざその中で、1回1時間20分とかなんですけど、その時間をとってかなりの大金をつぎこんで、いらしてるの

で、ま、楽しくと思うんですけど、その楽しさにも多分いろんな種類があるんだろうなと思って、今まではほんとに単純な楽しさっていう感じで、その時間笑いもあり、リラックスしてできればいいなって思ったんですけど、やっぱりこういう、ちゃんと伸びていくっていうか、きちっとこれだけ自分伸びたなとか、ある程度の満足感を感じてもらえるっていう意味での楽しさがちょっと少なくなっているっていうか。難しいんですけど。実際、楽しさ、小難しくカリカリ勉強するっていうよりも楽しく学べたらなっているニーズが多いので、それに合わせて、合わせることができるようになってるんだけど、そうはいつでもやっぱりもうちょっと、もうちょっとちゃんと伸びてるなっていうのを実感してもらえるようにしていきたいんだけど、今の時点ではそれが難しいなっていう…ですね。

Q : 今少しお話ししていただいたこととかぶるかもしれないんですけど、昔と比べて今、あ、ごめんなさい。どんなところをこれからもっと伸ばしていきたいとか、そのためには具体的にどんなことをしようと思うかなとか、そういうことはありますか？

A : 日本人の女性の方、20代30代で女性の方、受講生で多いんですけど、あとはまあ音大生とか、音楽系の方もいるんですけど、まあだいたい女性が多くて、それで、さきほどもちょっといったんですけど、楽しく、同性、同じ女性同士で、年齢もすごく離れているわけじゃないっていう意味で楽しくはできるんですけど、やっぱり楽しいだけで、おしゃべりで終わっちゃったらあまり意味がないので、ああこういう時にはこういうやり方がいいなとか、楽しく話しているように見えて、でも大事なことは頭に入っているみたいな感じで、やっていきたいなっていうのがあるので、もう少し、なんていうんでしょうね、そこでなにを教えるのかとか、そこでなにができたならOKなのかっていうのを、もうちょっと自分で自覚的になって、じゃあそのためになにをやるのかっていうのを考え直さなきゃいけないなっていうのはありまして。というのはこの一年ぐらいで教科書が変わったんですよね。今までの指定教科書が **Themen aktuell** から、**Passwort Deutsch** にかわって、その新しい教科書になってからわたしもまだ2、3か月しかたっていないのでその教科書まだよくわかっていないっていう状況もありまして、ただかなり面白く学べる教科書だなというのは感じているので、ちょっとその教科書がかわったっていうタイミングに合わせて、もう一回、ここではこういうことができたならOKとか、ここではこういうことができたならOKとか、っていうのをもうちょっと意識的に入れていきたいっていうのは。そうですね、教科書をもっとやり…それを使ってどうするっていうのを、ちょっともうちょっと考えないといけないっていう感じですね。あんまり具体的じゃないんですけど。

Q : あ、いやいや。そうすると例えば今おっしゃったようなことを実現するための、ヒントとかは講座で得られましたか？

A : それは、ありましたね。

Q : 例えばどんな？

A : プロジェクト授業という、そんな派手なことではできないんですけど、その、何かを覚えるっていうよりも、ドイツ語を使ってなにかしらのタスクが達成できるとか、そういったところにゴールをおくってという考え方はやっぱり新しかったので、そういったものを入れながら、という感じですかね。

Q : あとは、うんと、昔と比べてこういうことはうまくできるようになってるな自分、っていうのはありますか？

A : うーんなんでしょうね、それは教えることに関してっていうことですよ？

Q : そうですね。

A : 教えることに関して。そうですね、なんですかね。まあちょっと場合にもよるんですけど、教材をタスク重視型というか、何を、たとえそれが昔ながらの日本の教科書とかであったとしても、ちょっとそこ、それを一つのマテリアルとして、それをベターっと教えるっていうんじゃないくて、もうちょっと面白くアレンジするだとか、そういうのはちょっと伸びてきたかなとは思いますがね。

Q : 教える以外のことでもなにかありますか？

A : 教える以外のことですか？

Q : うん。思いつけば。

A : まあ、全体的に視野が広がったっていうのはありますし、特にあの、やっぱり語学ができれば経済的に、ビジネスがうまくいくとか、経済的にもうかるっていうだけじゃない感覚？っていうものの存在はなんとなくたぶん自分もヨーロッパ生活を通じてわかってたかなとは思んですけど、それがちゃんと明文化されて、言語化されたっていうのを講座では経験したので、そこらへんで、そもそもなんで語学やるの？とか、語学やるっていったいどういうことなんだっていうのが、大きな意志っていうか、大きな理念に触れたので、たぶんそういう考え方がいろんな分野にも影響しているんじゃないかなと思います。デザインっていうのも、デザインしてクライアントが喜んで売上げが上がってとか、そういうことだけじゃなくて、そもそもなんでやるのとか、そういうふうを考える視点ができたっていうのはあると思います。

Q : ああ、なるほど。はい。最後に二つ質問があるんですけど、今後の自分の未来像に関して、ドイツ語教師として今後こういうふうになっていきたいっていうものとか、あるいは自分にとっての理想の教師像ということでもいいんですけど、そういうのはなんかありますか？こうありたい。

A : そうですね。やっぱりいろんなニーズに対応したいっていうのはありますね。ほんとにドイツの大学に行きたいから絵勉強したいっていう人もいれば、娘がドイツ人と結婚するからわたしもやりたいわっていう 60代の方もいらっしゃるし、すごく様々ですし、

(中略)

ただ、そういう形でドイツ語を学ぶっていうことに触れる人もいるんだろうなっとい

う、新しいチャンネルが開いたといいますか、そういう感じなので、やっぱりこう、自分の中でこうでなければみたいなのが結構強い面があったので、生徒はこういう態度でなければとか、先生はこうでなければとか、そういうあんまりガチガチにならずに、いろんな事情、いろんな年代、いろんな事情がある人たちそれぞれに、でもその人たちなりに学べる。で、いろんな学び方も一つ二つとかじゃなくて、じゃあこういうやり方もあるよとか、こういう、こっちの方法が合うかもねとか、そういうのをいろいろ提案できる教師になりたいなっていうのはあります。

Q：ああ、なるほど。あと、こういうドイツ語の授業をしていきたいっていう、そういうのはありますか？

A：やっぱりかなりリラックスした雰囲気です。授業したいなっていうのはあって、普段の\*\*とかだとわりとリラックスした感じではあるんですけど、もうちょっとこう、なんていうんですかね、みんなでどこかに出かけながら学ぶとか、もしくはなにかを、趣味みたいな何か手を動かしながら学ぶとか、体験型というか。プロジェクト授業というほどガツガツしてなくていいんですけど、もうちょっと、やっぱり今、机に座って椅子に座って勉強がんばります、みたいなところがあるので、なんかもうちょっといろんな学び方があるんじゃないかなという。そういうのがあれば、楽しいんじゃないかなっていうのはあります。

Q：ああ、なるほど。こちらで用意した質問は以上なんですけど、教師としての自分の発展ということで考えたら、この話はまだしていないけど、ぜひ伝えておこうっていうものが\*\*さんの中でなにかありますか？

A：なんですかね。教師としての発展ですか？

Q：そうですね、前こうだったけど、こういうことがあってこうなった、とか。

A：私はデザイナーでもあり、教師でもありみたいなところがあるんですけど、なんかそういういろんな面を持っているのもいいのかなっていうのもありますかね。ずっと教えてると、なんか生徒が生徒らしくなっていく感じがあって、つまり、生徒さんは生徒さんでいろんなこと知ってたりとか、わたしよりも知っている分野があったり、経験がある分野ももちろんあるんですけど、なんか生徒は生徒らしく、教師は教師らしくおさまっていくというか、そんな感じがするので、なんか、さっきのいろんな形での学びがあればいいなっていうのとちょっと関係するかもしれないですけど、なんかこう、あんまりそういう、型にはまらないというか、そういうのも大事なかなという。なんか教える側もいろんな人生経験が必要で、もしかしたら教えるっていうのは最初は全然違う仕事をしていたとか、なんかそういうのも大事だったり、面白かったりするのかなっていう気がします。

Q：はい、いろいろと貴重なお話しをお聞かせいただいてありがとうございました。今は週何回教えてらっしゃるんですけ？

A：今は週三回ですね。三コマぐらいですね。(中略)

Q：なるほど。それはカルチャーショックですよね。

A：そうですね。どうもありがとうございました。